

「明治の人力車」復原

(株)大江車体特装代表取締役
大江 栄治氏



秋のビッグイベント「街なかにぎわいフェスティバル2016」(10月8日開催)で、当社が製作した「人力車」がデビューしました。かつては芸妓さんたちを乗せていた粋な情景を現代に再現し、山形のまちなか観光の役に立てれば、と復原したものです。人力車は、私どもの会社のルーツでもあります。この機会に自動車の内装・外装を手掛けている当社を紹介します。

創業は今から154年前、幕末の文久2(1862)年のことです。現在の東根市に生まれた大江甚六が、山形城下の職人町である鍛冶町の一角で人力車や荷車の組立製造を始めました。東京・本所の商店から人力車の車輪や箱入りといった部品を調達し、組み立てたのち、花柳界のある日本橋、浅草の車屋に納入していたようで、それを裏付ける筆書きの送り状が残っています。

昭和に入りますと自動車にとって代わり、当然ながら人力車や荷車の注文は減り始めました。2代目の甚七は、「大江幌内張店」の看板を掲げ、自動車の幌(ほろ)製作や内張(うちばり)へと業態

を転換します。それまでの技術を活かして自動車産業に参入したわけです。幼いころ、アメリカ進駐軍のジープの幌の張り替えをしていた光景を覚えています。

本格的に自動車分野に乗り出したのは3代目甚太郎の時代で、昭和38年自動車改造部門を新設しました。私の代となつてからは平成9年、特装车・福祉車両部門を、平成13年に乗用車内装張部門を立ち上げて今日に至っています。現在の主な事業内容は、特殊装備車両の製造、バン・ボディー製造、創業当時から続く幌シート製造、乗用車内装張、学校用マット・跳び箱などの縫製加工からなります。

このうち特装车製造は霊柩車、パトカー、消防車、福祉車両(身障者運転装置)、タンクローリー、タクシーなどの特殊改造を企画・製作、アフターメンテナンスまでをトータルでコーディネートしており、現在はやまがた地域産業基金の助成を受けて、高級車を使ったオーダーメイドの霊柩車改造に力を入れています。乗用車内装張は文字通り、車のシート・床・天井・ステアリングの張り替え・修理で、全国でもトップクラスのレザークラフトの技術者集団が担当しています。

さて、人力車製作について説明します。先に紹介したように当社のルーツは初代が手掛けた人力車です。明治期に製作された人力車の泥除けと梶棒が蔵座敷に保管されていました。2つとも桐材で漆加工されており重厚感を漂わせていました。これを復原し観光のひとつのシンボルにできれば、と思い、社員とともに約1年2カ月かけて製作することができました。

デビュー当日は、城下町やまがた探険隊の方が車夫となり、やまがた舞子、佐藤孝弘山形市長に試乗していただきました。この人力車が御殿堰をはじめ、満開の桜の霞城公園、文翔館をゆったりと走る情景が目に見えびます。

私どもは、「ここだけでしかできない仕事」、「あらゆるニーズに応える工夫」、「ひと手間を惜しまない心」をモットーにしております。先人が手掛けた人力車を復原したことで、あらためて、「はたらくクルマを創造する」使命の大切さを再認識した次第です。